

二 石井米雄『上座部仏教の政治社会学』(一九七五)

石井の書籍をここでとりあげる理由は、一つには上座部仏教研究の古典として日本の宗教研究者の間で重視されていること、さらに石井自身が述べているように、石井のこの書籍刊行後、上座部仏教と国家の関係に関する体系的な研究成果がみられず、今でも石井の研究が重視されていることなどがあげられる。

石井はタイの上座部仏教を事例に、脱俗のサンガと世俗社会(一般民衆の生活世界および王権や国家)が、どのようなつながりを持つかに焦点を合わせ、四つのモデルを提示した。つまり、一般民衆の生活世界とサンガの多様なつながりの社会的構造モデル、上座部仏教の組織化に関わる仏教エクレスシアのモデル、王権・正法・サンガの相関モデル、立憲体制下における国家とサンガ・王権の相関モデルであった。

三 石井の議論の問題点

石井のこの書籍の後、文化人類学による研究蓄積が増加し、特に一般民衆の生活世界とサンガとの関係について実り多い成果が表れた。しかし、サンガと国家との関係については、進展は見られなかった。理由の一つは、石井の使用した概念が比較研究に適用しにくいと言った点が考えられる。例えば、王権論への注目、王権不在の上座部仏教圏の国家のモデルにはなりにくい。また、トレルチのチャーチ論・ベッカーのエクレスシア論を下敷きにした、仏教エクレスシア論は、他国の現象に応用可能性があるのだが、エクレスシア(チャーチ)概念における中世キリスト教モデル故の偏り(カトリックへの偏り、近代性・ナショナル化・植民地化論の不在)から、比較研究への扉が開かれ

にくかった点も指摘できる。

四 エクレスシア(チャーチ)論から公認化論へ

そこで本発表では、石井のエクレスシア(チャーチ)論の可能性を引き出すために、宗教の公認化論として鏗々たることを試みた。それは、国民国家が政治や世俗性の優越性を保持しつつ、近代化を進めるために、諸宗教の影響力や集団や象徴を機能的に配置換えすることであり、具体的には、少数のカテゴリーに宗教を区分けし、ナショナル化・標準化し、さらに教育などの行政事業を通じてこれを促進していくものである。先進国の政教分離・世俗化とは異なるが、政治・世俗性の優位をつくる近代化のオプションと言えよう。

これは、国家による宗教のコントロールや、コミュニケーション(宗教民族対立)を助長する面も否めないが、他方で宗教が公共域に参加する回路をつくり、複雑な宗教民族対立を縮減し討議のアリーナを形成する試みであるとも言えよう。

バッファゾーンのチベット仏教

——リメ運動の展開に焦点を当てて——

別所 裕介

本論の目的は、今日のチベット仏教のグローバルな布置を「バッファゾーン(緩衝領域)」という視点から捉えることで、ヒマラヤ仏教圏を媒介とした研究方針にひとつの展望を開くことにある。そのために、近世に起源をもつ教流である「リメ(ris med)」に焦点を当てて、その時代的展開と地域的連環の具体像から前記の視点を説き起こす。

ここで取り上げるリメとは「無宗派」の意で、ダライラマ五世(一六一七―八二)期以降、東チベット・カム地方北部のデルゲ王国を中核としてチベット高原の辺縁部に広く伝播した、在地宗教伝統の相互交流による活性化現象を指す。最盛期には、いずれも優れたリメの学匠として知られるジャムゴン・コントウル・ロドウ・タイエー(一八一三―九九)、ジャムヤン・キエンツェ・ワンポ(一八二〇―九二)の二名を主要な編纂者として、「テルマ」と呼ばれる在地の埋蔵系経典(自然界や瞑想中の意識から取り出される教え)を含む膨大な出版物が編まれた。戒律を重んじ、顕密双修を基本とするゲルク派が、階層化された巨大僧院システムのもとで出家主義を貫いたのに対し、宗派の相違を超え、実践者同士の横断的学びを尊ぶリメの気風は、ゲルク派の勢力が及びにくかったカム北部からアムド南部にかけて強固な地盤を形成し、土着の宗教要素を取り込むことで独自の発展を遂げてきた。

一九五〇年代に入ると、中国人民解放軍のチベット進駐によって、チベット情勢は一挙に流動化する。五九年、ダライラマ一四世の亡命に伴ってゲルク派教権は崩壊し、チベット仏教全体がディアスポラの宗教としてヒマラヤの外側での再構築を余儀なくされた。当初、ダライラマに率いられたゲルク派が亡命政府と協調行動をとったのに対し、東チベット出身の高僧たちは、従来から非ゲルク派の教系が栄え、リメの系譜と一定の親和性を持っていたシツキム、ラダック、ブータン、およびネパールの仏教圏を拠点として教学再興に勤しんだ。ネパールに住錫したデイルゴ・キエンツェ(一九一〇―九二)、シツキムに

寓したカルー・リンポチェ(一九〇五―八九)らは、亡命第一世代を代表するリメの高僧であり、同時に、欧米諸国で高まるスピリチュアル・ブームの追い風を受け、諸国を足しげく歴訪して施主層を開拓し、外国語に堪能な高弟を海外の伝道センターに送り込むことで、海外拠点と自らが住錫するヒマラヤ仏教圏の本拠地とを強固に結びつける役割を果たした。

これに対し、八十年代以降の開放政策がもたらした本土チベットとの連絡の回復は、ヒマラヤ仏教圏を確固たる二次拠点としつつあったリメ系教派に重大な転機をもたらした。この時期頭角を現していた亡命第一世代後半期の高僧たちは、海外伝道と並行してその故地である東部チベットへも熱心に足を運び、現地の僧院の再建や、在地の重要な化身系譜を復活させる仕事に取り組むようになった。また、本土への往来が可能となると共に、欧米に代わる新たな施主として華人系チベット仏教信徒が大きな割合を占めるようになってくる。こうして、亡命第一世代後半期から第二世代にかけては、ヒマラヤ仏教圏で成人し、なおかつ流暢な漢語を操るリメ系の高僧が目覚ましい活躍を示すようになった。

以上のようなプロセスを経て、リメの二次的拠点となったヒマラヤ仏教圏は、名実ともに、本土チベットと海外の布教拠点とを結ぶ「バッファゾーン」としての媒介機能を持つに至った。それは、世界各地の伝道拠点から上がってくる経済的支援(お布施)と、東チベットの故地(霊性の源泉)とを接続・中継する領域として特色付けられる。以上のように、本土チベットとグローバルな信徒集団を結び合わせる領域としてのバッファ

ゾーンのチベット仏教が見せる文化的資源性を、特定の僧院を事例としてさらに詳細に検討していくことで、現代チベット仏教が持つグローバルな動態の一端を明らかにできると考える。

シェンラブ伝に於ける孔子の位置

津曲 真一

チベットの宗教文献には屢々、古代中国の思想家・孔子に比定されるコンツェと呼ばれる人物が登場する。古代チベットに於いて孔子は、孔夫子の音写と思われるクン・プー・ツイ(khung phu'u tsi)、あるいはクンツェ(khung tse)の名で知られていたが、これが次第に転訛し、彼は後世の文献中でコンツェ(kong tse)という名で呼ばれるようになる。本来、チベット文化とは異なる文化に属するコンツェは今日、チベット文化域において広く行われるト(gto)と呼ばれる避禍招福の儀礼や、ナクツイ(nag tsis)と呼ばれる占星術に関する文献の中に登場する。また彼の名は、チベット語で「幻術の王」を意味するトゥルギ・ギェルポ(phur l gyi rgyal po)という呼称を伴うことが多い。

コンツェに関する表象は仏教徒とボン教徒の間では大きく異なっている。トゥカン・ロサン・チュキ・ニマ(一七三七―一八〇二)、ダライラマ五世(ngag dbang blo bzang ryga mtsho 一六一七―一六八二)等の手に成る仏教伝統に属する諸文献に依れば、コンツェは中国の五台山において文殊菩薩から占星術の技術を授与された存在であるか、或いは建築の技術に秀でた人物であったと伝えられる。一方、ボン教伝統では、

コンツェは占いの儀式執行中に瞑想の中で呼び起され、儀礼執行者に吉兆を伝える超自然的な存在とみなされており、また同宗教伝統の聖者であるシェンラブ・ミウ(gshen rab mi bo)の伝記によれば、コンツェは熱心なボン教信者であったと伝えられている。同伝記に依れば、コンツェはガプツェ(gab tse)と呼ばれる占星術のための計算図表を掌に持つ誕生し、成人して湖上にボン教寺院を建設した後、シェンラブに帰依し、自身の娘をシェンラブに与えて親族関係を結んだとされている。この他、同伝記には敦煌文書に含まれる所謂『孔子項橐相問書』に見られる孔子とその師と伝説される少年の対話と類似した物語が挿入されており、チベット文化における孔子の受容のあり方を見るうえで極めて興味深いものとなっている。

本発表ではコンツェとシェンラブの事績を描いた宗教画を参照しながらシェンラブ・ミウ伝に於けるコンツェの描写を概観し、ボン教と異文化の接触のあり方について検討した。

ナオジヨテから見たパールシー・コミュニティ

香月 法子

ナオジヨテとは、先祖代々ゾロアスター教を信奉するパールシーにとつて、パールシーであれば遅くとも十五才までには受けないといけない、伝統的なゾロアスター教への入信儀礼とされている。全てのパールシーが受けることが当然であり、寺院内の浄化儀礼などよりもパールシー一般にとつては、もっとも馴染みのあるゾロアスター教儀礼である。

しかしゾロアスター教の儀礼として、その成立過程を追って